

『風流俄天狗』研究(一)

— 翻刻と解題 —

山本和明

はじめに

天保三壬辰年仲夏に刊行された『風流俄天狗』は、書肆の求めに応じて、当時の俄の名手であった村上杜陵が、俄艸稿の中から選出した十五編の俄を掲げたものである。のちに「向に俄天狗といふ書。秋の樹ならぬ桜木に彫て世に弘うせしより。世上に天狗追々出来て。宵宮祭の木の葉俄はいふも更なり。未芸の流俄天狗に至る迄。皆其鼻を高くせし」(『風流俄天狗』二輯序・天保十二年刊)、「抑俄天狗初輯二編世に出てより、魔風大ひに起り、近頃俄自慢の種本、東西南北に飛行し、今既に三編に及ぶ」(写本「古今二和歌集」附録・嘉永元年序)と称される如く、俄の一期を画した作品集であった。尾州の小寺玉晃『見世物雑集』巻之四に「此節(注―天保四癸巳年)二〇力大坂にて大二流行のよしにて甲乙之番附等有之」とある如く、大坂での俄の流行は名古屋にまで鳴り響くほどだったようである。その流行をもたらした要因の一つに『風流俄天狗』の刊行をみることででき

よう。

本書跋文、古今二和歌集附録の記載に拠れば、著者村上杜陵は浪花權屋町の人。名は甚蔵、諱名杜陵、爪長山人とも号する表具師であった。多芸にて、江戸歌鳴物流行の時、友の需めに応じて指南者となり、吉田天山の門に入り軍書を談ずるほかに、吹弾の伎を指南して助業ともしたという。また書を能くし墨名も高かった。俄に関して「今様俄の祖」「此妙に於て此人前後になし」と評されるほどであったが、天保三年八月、五十五歳にて没した。『風流俄天狗』が刊行されたのが天保三年仲夏のことであり、刊行まもなくのことであったと思しい。巻末広告に「来巳夏」二編刊行と記載されていたが、実際に刊行されたのは、金鷹堂本席作、倉俵家淀川補訂にて、杜陵没後の天保十二年であった。

本書凡例は、既に『日本庶民文化史料集成』第八巻「寄席・見世物」に翻刻されており、幕末期の大阪俄の動静、俄略史、果ては俄の作法や演じ

方をも記したものと評価されている。また『民俗芸能』三九（昭和四五年冬）に、宮尾しげを氏蔵本より巻之巻のみ翻刻がなされている。その解題中、宮尾しげを氏は初版の形態について、口絵が色摺であること、表紙が鼠地に俄のかつら散し模様であることを指摘。しかしながら、京都大学文学部閲覧室蔵『風流俄天狗』二編（請求番号P1-49）は、かつら散らし模様ながら、河内屋源七郎版の後摺である。同様の表紙を持つものを初摺とするに、検討が必要と思われる。

諸本管見

管見に及んだのは九点。①京都大学文学部閲覧室蔵本（P1-49 前掲二編と同帙）、②石上敏氏御架蔵本、③筑波大学図書館蔵本（779.2/Mu43）、④大阪府立中之島図書館蔵本A（朝日229.6-1）、⑤大阪府立中之島図書館蔵本B（979.1-14）、⑥大阪府立中之島図書館蔵本C（979.1-14②）、⑦蓬左文庫尾崎久弥コレクション蔵本A（尾26-16 マイクロフィルムNo.1655による）、⑧蓬左文庫尾崎久弥コレクション蔵本B（尾26-17 マイクロフィルムNo.1656による）⑨東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（4-14084-5 マイクロフィルムDJF001による）である。以下、確認したい。

調査した範囲でも表紙模様は多彩。例えば、②の石上敏氏御所蔵本は、天狗など鳥羽絵風に洒脱に描かれているし、⑦の蓬左文庫蔵本Aでは、「か」のくずし字（字母「可」）が輪の如く見えるのを利用し、上下二つ重ねて瓢箪を描き、「にわか」と読ませる趣向の絵が散らし模様で表紙を飾っている。⑨の狩野文庫本も同じ模様である。③の筑波大学図書館蔵本と⑤の中の島図書館蔵本Bは、渋引地杉模様の表紙で、⑥の中の島図書館蔵本Cは③⑤と同一版木を用いながらも、色違いである。宮尾氏蔵本の鼠地に俄のかつ

ら散し模様のものを加えても様々な表紙模様があることがわかる。ちなみに①④⑧は模様なし。残念ながら⑧はマイクロフィルムによる確認のため、色など細部未確認だが、①の京都大学文学部閲覧室蔵本は、④と異なり布目地となっている。

版元であるが、⑦の蓬左文庫蔵本Aが前川源七郎版であるほかは、⑨を除き全て「天保三壬辰年仲夏発兌」河内屋直助他四肆版である。但し、⑨の狩野文庫本について、ホームページ公開データでは「江戸浅倉屋久兵衛版」となっているが、マイクロフィルムを確認したところ、書肆を示すものはなかった。同じ表紙模様の⑦の前川源七郎版が、奥付位置に書肆印を押しているだけであったこと、狩野文庫の二編が前川源七郎版であったことを考え併せてみても、恐らく前川源七郎版と思われるのだが、今は未詳としておく。ちなみに『享保以後大阪出版書籍目録』天保三年の項に本書の記載はないが、天保十二年の項に「風流俄天狗二編 五冊／新板発行申出／板元 河内屋直助／右板元よりの申出でを本屋行司慎組にて聞届け板行／申出年月 天保十二年五月二十日」とある。そのことから初編（便宜上「初編」と表現。）でも、河内屋直助他四肆版のものを初版系統と判断してよいだろう。

さらに口絵に注目してみれば、①④⑧のみ色摺がなされている。また①④（⑧は原本未見）は、題簽が白地に朱色にて摺られているのに対し、ほかは同一の版木を用いながら浅黄色の地に墨色で摺られている。同一版木であることを考える時、当初墨色で摺られていたものが、後に朱色とは考えにくく、口絵が色摺であることと併せて、①④⑧を初版初摺系統と考えて宜しいのではないだろうか。

ちなみに京都大学総合図書館蔵『風流俄天狗』二編（8-677.12）は見返し・口絵・挿絵が色摺であり、二編としての初摺本と目されるが、それと

同じ表紙意匠の初編が③⑤である。恐らく二編刊行の際に再摺されたものであろう。

初摺本と目される①④(⑧原本未見)は、全て同じというわけではない。①の表紙は縹色布目地。④は青丹色無地。①は漉き具合の良い楮紙であり、上製本と思われる。

本稿では、従来全文の翻刻がなされていない『風流俄天狗』初編を紹介するにあたり、管見に及ぶ範囲で、最善本と目される京都大学文学部閲覧室所蔵本(P1-10)を翻刻し、その略注を付したいと思う。紙面の都合により本号では、翻刻全文を掲載し、併せて底本の書誌について述べる。次号以降にはその撰取芸能に関するを中心に簡単な注解等を付す予定である。

なお、本稿は大阪商業大学商業史博物館にて実施されている研究会の成果の一部である。山本が基礎稿を作成して報告し、研究会同人(大阪商業大学教授石上敏氏、元大阪商業大学教授中川光利氏、大阪商業大学商業史博物館学芸員小田忠氏)のご助言を得た。さらに、本稿作成に於いても、中川光利氏、石上敏氏に初校段階での点検をしていただいたことを附記しておく。

貴重な紙面をお与えくださり、翻刻をお許しくださった大阪商業大学商業史博物館の皆様へ感謝申し上げます。

底本書誌

簡略に底本の書誌を記しておく。

*所蔵 京都大学文学部閲覧室所蔵。請求記号P1-49 受入番号

168872

*体裁 半紙本五卷五冊。袋綴。縦二二・六釐×横十五・七釐。

*表紙 縹色布目地。

*見返し 藍色にて「似和歌轉具」。

*題簽 原題簽。縦一六・二釐×横三・七釐。表紙左肩白地の紙に、

朱色にて「二八カ」文字繫梓並びに「風流俄天狗 一(五)」「風流俄てんぐ 二」「風流似和歌天狗 三」「風流にはか天狗 四」とある。

*作者 村上杜陵。画師 浦川公左。浄書 加藤近張。序文 十方

計梅玉(三世中村歌右衛門)。跋文 文淵堂主人(河内屋直助カ)。

*刊記 天保三壬辰年仲夏発兌。鶴屋喜右衛門(東都)、河内屋太助、河内屋長兵衛、河内屋直助(以上三肆浪花)。

*蔵書印 「京都帝国大学図書之印」「松山蔵」。

*備考 卷一見返し、「惣目録」、「口絵」が色摺となっている。

《翻刻凡例》

翻刻にあたって次のような措置をとった。

①漢字は常用漢字にあるものはできるだけそれに直した。その使用文字に誤りもあり判断を下した箇所もある。

②本文は読みやすいように、適宜濁点・句読点を補ったり、改行を施した。なお、本文の句切り符号(○)は、本文のままとした。

③二行割書部分はへに括弧のようにした。

④挿絵、そのほか記載すべき事柄は【】で示した。

※本書の翻刻を許可くださいました京都大学文学部閲覧室に深謝申し上げます(京大文図関第18号許可)。

※本文中には、人権に関わる語彙が用いられている。それらは、資料性を重視して本文のまま翻刻したことをお断りしておく。

『風流俄天狗』翻刻本文

【見返し】

序
 先年僕東都に在し頃。或博学家に逢て聞る事あり。もろこしに
 名だゝる韓退之とかいへる人の辞に。鳥は以て春に鳴り。雷は夏。
 は秋。風は殊に冬に鳴。人に於ても又同じとかや。茲に今時諸芸の道

に鳴る人多きが中に。滑稽に秀たる村上雅哲は。天性自然に妙を得て。
 三弦や鼓の鳴声に連。其名普く四方に鳴号けり。抑此俄てふ伎戲は。
 夏祭りの輿囃子より。年忘れの圓坐宴に至まで。四時ともに治灘なく。
 専盛んに流行す。其趣向は青砥左衛門が御影参りに。五十鈴川橋よ
 り一文銭を投させ。且神崎の梅がえは。富の符札を買て三百兩の大節
 を懐金など。時代と世話の変格を。看者ヤンヤ声を出して成程上手と
 嘉称ぬはなし。然中より選出で。会筵毎に鳴らしたる審組の数々を。
 一二に筆記されし艸稿本をこたび桜木に影せ。例の序詞一語を副て
 よとの。需に諾して此巻をひらき見るに。何れも奇中の寄といふべく。
 予も狂言の戯作は成すと云へども。又々夫とは事換り。なか／＼毫
 の及ばざる所実に感服なし侍り。斯て此冊子世に弘く成れば。撰者の
 美名は益鳴り音を倍し。書肆は発兌の当日より。其処彼所からの貨殖
 多く。設得し礼宝はおのづから。倉庫に鳴々らん事。響の音に應ずる
 が如く成るべしと。俱に演義を祝賀で。傍から太鼓を鳴らす事しかり。

天保三年やよひ吉辰

十方計梅玉

卷之一	三番叟 <small>さんぱんそう</small>	いな光り <small>いなひかり</small>	おくれ咲 <small>おくれざき</small>
卷之二	杓子定木 <small>しやくしじやうぎ</small>	思案の外 <small>しあんのほか</small>	千代の戯 <small>ちよたわむれ</small>
卷之三	月の名所 <small>つきめいしよ</small>	ふたつ玉 <small>ふたつたま</small>	水になる湯 <small>みづなるゆ</small>
卷之四	大三十日 <small>おほみそか</small>	観世水 <small>くわんせみづ</small>	浮世からくり <small>うきよからくり</small>
卷之五	ぬかに釘 <small>ぬかにくぎ</small>	尾上の影 <small>おのへかげ</small>	鬼やらひ <small>おにやらひ</small>

惣目録さうもくろく

凡例

おしてるや浪花に双び夏祭に、俄てふものゝ濫觴は、いとふるき事のよし。天照太神の岩戸がくれ、庭神楽を略して俄といふ杯、または、掘川院の御時尔、さるわざくれのためし、或は、鎌倉將軍の前に出たる鼓の判官、太閤の曾呂利が頓作、みな是俄なり杯とは、好主の古事附にして、更に当らず。こは夏祭の陽気に浮れて、俄じや思ひ出したといへる古言こそ其起りならん。住吉御祓下向の人、酒興に乗じての戯など古き文に見へたり。いつの頃よりか、御輿渡御の先へ流しと唱へて、淀川八景、或は千松の蜻蛉つり、皆々無言にての戯な

り。後には夕立の跡にて雷の姿となりて、唯今はおやかましう御坐りませふ杯と、もの云事の始まりと見へたり。唐の犬拾ひに虎のほへつ、トラ／＼の泣声こそ風流也。市中の売物声、花う李の殻籠、たんでぬつた顔、七ツ目の由良の介、わざとほふらつや／＼杯名高し。立つてのおどけ事、行馬筋のみなりにしに、其後色里に夜に入て様々の趣向をなす事と成ぬ。

半面杯いへる人、此道に名高しといへども、さまでの事も無りしに、治る御代のためたさに、去年よりことしと弥増に趣向をなし、中国の仁兵衛といふ人、始亭三絃を入たるよし、古人に聞つたへたれども、慥ならざるは、唐土にて始りしといふ事の、日本はひのもとにて、開けし事のまゝ有よし、識者の説あり。人の心九十分尔して、爰に其心あれば、彼所にも思ひつく事、いづれが始り、誰が最初といふ難き事多く、あながちに昔を慕はず共、谷風、小六杯を見たる人こそ果報ならん。故人黒谷の浄光再生なすとも、梅玉をおす事難し。こは代の流行と云物ならん。俄とても其如く遙の昔は知す、北にて百堂、隆巴の古雅なりしも、二溪、谷丸の作意風流を増し、南にて柳杯と云るは、一個の上手なり。其頃文人の上手も有、文盲の名人も有し由。北の壁杯と云るは、縫俄逆、浄瑠璃或は歌の唱歌に、文句を作りかゆるの上手也。其後弁連として此道感能の人出来り、続て袖岡杯は天性の名人成しが、をしひ哉、年毎に造り物の開帳縁起、又は神社の寄進など、日数を興行せし故、戯場の衣装を用ひ、毎々同じ趣向をして、其風雅を失ひしこそ歎はし。堂島の泉吉、北船場の為五郎杯、一度用ひたる

を再びせざる社風流也。

何人の云出しか、此道の不風雅成を葉子谷俄といやしむ事有。今や浪花に名人と呼ぶ人希なれど、流行は甚しく、されば歎はしきは、此業の始より、貴人のせざる事故、誰が家元、是が規矩といふ事なれば、東西南北の好主、おのが心の儘に一時の戯をなしける社うたてし。物事の愚俗なるを、俄の様なりと唱へらるゝこそ憂けれ。ものゝ名も所によりて変る事有。浪花の俄は江戸の茶番、去年の事、今年の間合致。即坐に思ひ付たる社俄といふ本意ならんに、今は年経りて人も知たる趣向の俄、又は何某の当りを取しを、其儘にて坐敷杯尔亭もする事が、毎とし祭の軒付に二組三組もする事まゝ有よし。是等は葉子谷といふ迄もゆかず。たとへがたなき不風雅なり。天山老師の言に、愚人の云事は、痴漢が面白がる物なりとは宜也。何を見せ亭も面白がる人の有故、おのが趣向の当りを取しと思ふ社愚なる業也。むかし何某とかいへる俳優の言に、都て狂言の趣向は、婦女子の心に叶はざれば、評判よろしからずといふは尤也。既や俄など、一時の興を催す事にして、貴賤男女に通俗して、おかしみ有ざれば、其かひなし。

予十五六才の頃より、此業を好み、始めは己が思ひ附の拙きを顧ず、廿歳のころより、半也、為五郎の群となりて、北にて泉吉、南にては弁連、袖岡杯と並びて、坐敷俄をせし事しば／＼なりしに、此輩皆々故人となり、旧友には北に株善、泉木、光浪、芦橋杯、今に壮んなれど、此業を止られ、便無りしに、後世恐るべし、上町に淀川といへ

一見識の俄師、角井は天性にして雅也、本虎の作意今様を穿、其余、南玉、源平杯の好主出来り、今や盛に俄をする事と成ぬ。時なる哉、水無月には却て疎く、明る正月より暮る師走迄、爰の振舞、彼所の宴会、其席に招るゝ事繁く、一月に七度に及とも、五度を欠ず。この一群の俄に限りて、貴き君に見備はず事の嬉しさに、何をがな新しき趣向をなさんと、心を砕く事と成ぬ。

我俄の心得は能狂言に非ず、歌舞妓にあらず、古雅にしていま様をかね、おかしみを趣とする事なり。其故に一芸を極めたまふ君子の、此業を学ぶ事難し。そは何故ぞなれば、本業の舞振あるか、又は歌舞音曲杯の己が得たる事有ば、夫を見せんとするには有ねども、自ら顕るゝが卑し。我旧友の中にも、過たるは及ばざるの本文を忘れし徒も有て、石橋の狂ひ、道成寺の乱拍子となる俄の趣向に、本業を習ひ得て、俄の本意を失ひし事有。また弁慶、朝比奈の形相にやつす時、様々の小道具を身にとり、附て見せしも不風雅なり。願くはおのれなりにして、其姿に見ゆる社よからむ。たとへば骨接療治、按摩の所作が、たて立廻りになるの見へ、詫言に手を合す姿の、祈の見へになる杯、俄の意なり。影離子に、無益の琴歌、在郷歌杯をあつらへたるも、不風雅也。俄の骨木は、在郷歌にて出端をなす時、其姿自ら歌舞をなし、仕出し役者に等しき社見にくし。俄の姿は楽焼の如くにして、其役々の情を深ふし、先医者役なれば、音声万事医者らしきこそ宜しけれども、其医者、師直となる趣向ならば、歌舞伎言、骨髄の師直と成り、其間々にボケと云言遣ひ。ボケはとぼけるといふ略語にして、

是ぞ俄の一大事也。依て其役に、医者腹、師直の腹、俄の腹と、姿言共に、三体に分るを極意とす。世上の俄を見るに、此利を弁ず。医者は一部始終医者、夫も俗言多く、親仁の役は始から終迄、親仁めかしたる故、少しも風流滑稽の場に至らず。故人耳鳥齋の鳥羽絵は筆すくなにして、其人物の情の深き事、感に絶ゆ。鯨の料理を見る栄耀も、鯛の荷を眺る旦那、奥様、妾、下女、遊婦、それ〴〵の分ち有事、奇々妙々也。俄則彼顔の如に有たし。厚情にして俄の顔、俄の姿、俄の音声といふ物有。其妙を得たる人、我見来りしは、泉吉、弁連、袖岡の三子に限る也。所謂天性といふ物にして学事難し。都て芸道の極意は禅家の悟道に等しといへる社宜なり。世に俄をして、俄を知ざる者多し。我群の中にも、生れなが羅にして知者有、執心深ふして知ざる者有。斯いふ我も知ぬがち也。されど我群を招請の君子社、却て見好者にして、其善悪を知らたまふ社恥し。故に我友を励し、せめてはつれ〴〵の一枚も説、店出しの祝詞、狂歌、季なし発句にて裳習はざれば、風流自ら備らまじと、己が文盲を後悔して、常にすゝむる事也。

こたび好主の需めにて、我俄の詠草を梓にし、其役々の意をしるし、其文の詳なるを見れば、是迄の俄選を見るに、此業を得ざる君子の選にして、四方の俄の草稿を集たる物故、何とな興薄し。今著所は、文意を委し、好主の君是を見て、俄に思ひ出したる体にて、間似く興じたまへかし。且初心の教授ともなれかしとは、チト云杉の木々憎ひ哉

天保三壬辰仲夏

村上杜陵謹識 印 印「杜」「陵」

風流俄天狗巻之壹

三番叟

息子

丁児

番頭

へかげにてはやりうた△申く若旦那さま。早ふお帰りなされませ。又私しが叱られます。□我もマアあほうな者じや。連中の並んで居る所へ来て、「早ふお帰りなされませんと、隠居さんがやかましようござります」と大きな声で、誰があんな事いへといふた。△番頭さんが、「そふいふて呼ましてこいと云てござりました。□そんな非雅な事がどこに有物で。我も顔見勢の景気見たが、どふじや、おれが手打聞たが、どんな物じや。△多らひ面白もんでござりますナア。ありや申、妙見講とは違ひますかへ。□あほういふな。妙見講や家根を盗人の歩行とき、打拍子木と一口にいへる物か。おれが衣装見たか。△多らひ宜着物でござりますナア。あなたとんと役者の様に見へました。□あれで姫がおいでるのじや。手打連中といふ者は、粹の骨長じやはやい。△あほうの大関じやと云事じやござりませんか。□何ぬかすぞい。アノ衣装が三十兩ほどかゝつて有。こんな事内でいふなよ。△ハア其銀をまだ遣なさらぬといふて、此間やかましよういふて来ましたのじやナ。□あほういふな。半分遣つて有のじや。△モシもふお内でござります。叩きませふ。○ハイお帰りでござります。へ此ときばん頭、ひだまへ

だれ、手あんどどうもつて出て△誰じや、今時分に戻つたのは。△若旦那でござります。○何馬鹿旦那じや。おのれ憎ひ奴じや。今時分に戻つて明きやせん。△モシ若旦那さん、明んといふて居ます。□何じや明ん。憎ひ奴じや。ドレおれが叩こ。長吉此羽織もつて居。へト長吉にわたす。長吉かたげる。明んといふのは誰じや。おれじや。明きやいの。へアキヤ。へチヨン。へチキチヨンチキチ。はやふ明きやいのふ。キリ。チヨン。○若旦那、たしなみなされ。御近所の手前も形が悪ふござります。△申、若旦那さん。鳴の悪ひ拍子木じやござりませんナア。□フウそふじや。能ふ鳴別に紫檀じや。○嗜みなされ。子供か何その様に、無ちや口合ばつかり云て。□明るの明んのおれが内へおれが戻つたのじや。我はいつたいなんじや。【挿絵 顔見せやかきそう秤のより所】○これは此店の支配人番頭重兵衛でござります。△へちの若旦那いよ。こくどふ。□へ明キヤ。へチヨン。チキ。チヨンチキチキ。明きやがれ。いま。しい。エイへ此ときばんとう、手しよくを下におきすはる。○へはどかりながら若ふはござりますれば、御免を蒙りまして、この所より門に居ての御主人へ、鳥渡御異見を申上奉ります。左様な御身持にては此御家督相続及び絶ましたる儀でござります。私事は先旦那の時分、十一歳の時始めて御当家へお目見へ仕りまして、至極不調法なる者を旦那様の御世話にあづかり、当年が卅二歳。一兩年の内には宿這入仕りまして、末々に至りましては別家衆中の数にも入まするやう、恐ながら希ひ奉ります。△番頭か

らして一向体がない。□あほうつくさずと明んかいナア。○明ましやふ。△明ましてゑいあほう。○何ぬかすのじや。□我身も今のは何いふのじや。アンナ事いふと気が違ふたかと思ふて近所から引合せがいのぞへ。○あなたに異見して置のも、後見先の杖じや。△申、向ひの鶏が鳴て居ます。○それ見たか。夜が明るのじや。□へなくはむかひの鳥く。△日は出るとも。○マアお這入なされ。□へ左有は直に這入ませふ。○へこまつた事。□チヨンくチヨチヨン。へこれよりさんばそう、三味せん、つゞみ、大小ふへ入。長吉はをりをかたげ、三番叟になる。ばんとういろくすてせりふ有。止て。○おのれはゑらひ長吉がいじや。□おれが遣ふ丁児ほど有て大分粹な奴じや。○そんなしやうもない事おつしやるよつて、あんな事仕おる。おのれいなしてこます。△番頭いふてか。お前の自由にはならぬ。○おのれ憎ひ奴じや。いつそ請人をへよんで来ふかどふしたらゑいぞへ又さんばそうになる。□もふゑひわいの。へエイ○へエイ□へエイ○へエイ□へエイくくく。へばんとうはいきどふりのエイ。むすこはなだめのエイ。△イヤア○否の応のと何ぬかすのじや。□其やうに叱らんが能ひ。ありやちつと酒呑したよつて、酔ふて居るのじや有ふナア、長吉。△左様じや。へ酔たんからこないにチャルのじや。○へハア、そんならわれは酒の酔を三番叟とするのか。

いな光り

△医者

□按摩親仁

へこたつにくろきふとんかけ有。めしびつつかたわきに入りあり。とこに

むめのではないけ有。かごぶとん出し有。かみなりなる。△ハア、時ならぬ雷鳴。不順な事じや。是では病人が出来る筈じやが、医者と云者は人の病気を念懸る事は、更に仁術ではなめて不実な事じや。其報か、此間から私しが病氣じやが、今日は大分能ひ。併し肩がつかへてどうもならぬ。按摩の太兵衛、呼に遣つて呉よ。フウ最今来るか、よし。△旦那さん、太兵衛でござります。大きに遅ふなりました。△ヨ、太儀じや。今はこわひ事な。△左様でござります。私は雷は大嫌ひでござります。△貴様も雷きらひか。△さけは好でござりますなれど、雷は嫌ひでござります。△酒と雷と一口にいへる物か。今は何時じや有ふな。△お、方六つでござりませふ。△五七は雨に、四ツ日照。六つなら風じやナア。△そりや地震じやござりませんか。△地震と雷とは逃れぬ中じやないか。△あほらしい。○時に先生さん、此間は御不快と承りましたが。△サア不順なゆへ、病人が多ひ事じや。併し此方へは療治をいふてこぬ。コリヤわしが匙が廻らぬ評判が高ひゆへ其筈じやが、此方の病気が幸ひといふは、請取た病人がなひよつて人の難儀にならぬ。夫だけ悦んで居る。△なんの夫悦ぶ事が有て。△併し冷る時分は冷るがよひ。少し不順なと、今の様に雷鳴じや。ハ。△なんにもおかしい事はござりませんが。△是れは雷鳴の事。いやおれが笑ふのじや。△そんな俄は宵の口に来ますぞへ。△サア療治しやふなら宵の口じや。早ふもんでくれ。巨燧で仕て貰ふ。へト此ときはをりをぬいで、おびをまへえまはす。こたつへかゝる手に医書をもつてよみ居る。△かしこまりました。申、向ふの方に入てござります

は何でござります。△あれは食櫃じや。△旦那さん、怪からぬ凝つてござります。△ハア凝つて有か。△あなた是が分りませんか。△きつふこつて有ば、そちのやうな老人にはもまされぬ。△そりや又、何ゆへでござります。△凝ては祖父さんにあたはずじや。△あなたの口合も医者しいものじや。其医者しい次に、私も医者に成たふござります。どふぞあなたのお弟子になされて下されませんか。△悪ひ思ひ附じや。よしにしたが能ひ。医者といふものは流行ぬと何喰まひと儘じや。蜜柑が赤ふなると青ふなるといふのは正月言じや。此方等は年中青ひ顔じや。△私はあなたに附歩行て覚よふと存ます。△情けなひ。貴様が附歩行て呉て叶ふものか。△私が附歩行たら、けつくあなた流らふと存ます。△そりやどふいふもので。△老人供して医者来るへ。△困た物じや。そちも折々口合いふのがやまひじやナ。併しそちは能ひ息子が有て結構じや。治兵衛はおとなしそふな者じや。△いへく治兵衛は倅じやござりません。弟でござります。△フウ弟か。いっそや病氣で有たが、最能ふ成たか。△左様でござります。あなたが直して遣ふとおつしやつて、お薬百服も吞しましたけれど、とんと利ませぬ。△サアおれの薬は利ぬのが妙じや。△何の夫が妙な事が有て。扱其治兵衛の事についてお咄しがござります。あいつの嬢は髪結でござります。△それは結構じや。今時は貧乏人の嬢は髪結か取上婆の事じや。△サア其嬢を住しまして、夫からしみたれて居ます。諺の通、おとこ寡人にぼろそがちがつて居ます。△それは難義じや有。そちの厄介じやナ。△夫に附まして。△コレく。咄するなら手を

止やめずと仕してくれ。□按イヤ是これが勝かつ手でござります。△医そちは勝かつ手でも此こ方ちの工く面めんが悪わるひ。□按畏おそりました。夫それに附つて頼たの母子もしが致いたしたふござりま
 すが、どろぞ壹いち枚まいお持もたされませんか。△医ア、情なさけなひ。頼たの母子もしは聞きく
 も嫌きらひじや。落おとして遣つかふのは能よひが、跡あと懸かけるのがいやじや。遣つかふて殻から
 懸かけひでも大だい事じなひのが有あつたら知してくれ。□按そんなたのしがどこに
 有あるもので。△医そちが色いろくの事いふので逆さか上して来きた。巨こ焼たうを出でて腰こしか
 けてもんで貰もらふ。へトこたつへかごぶとんかけてこしかける。かんし
 やうく牛うしにのる見みへになる。【挿さ録ろく 初はつ雷らい七しち五ご日にち生せいちとめ】手てに
 本もともつ。▽按それではお足あしが冷ひやませふ。失しつ礼れいならんこ遊あそばされませ。
 へトはをりをさかさまに前へあて、帯おビにはさむ。さしぬきの体ていになる。▽
 △医コレ太た兵へい衛ゑい、おれは癩かん症しやうじやよつて、今いまのやうな事聞きくと氣きが悪わるなる。
 □按へイ癩かん症しやうといふのは皆みな氣き儘ままじやござりませんか。△医サアおれのかん
 じやうは人ひとが物ものでも呉くれたり、姫ひめでも傍そばに居ゐると起おこらんが、無む心しんでもい
 はれたり、節せつ季きが来くると忽たちちおこる。貴き様さまおれの癩かん症しやう知しらぬか。□私私
 しは又またあなたはずぼらじやよつて、癩かんじやう氣けはなひと思おもひましたが、
 そんならあなたはかんじやふ性しやうさまでござりませんな。△医貴き様さまは夫それを知し
 らん太た兵ひやうじやナ。□按あほらしい。△医そちの治ち兵へい衛ゑいの病やまひは直ならぬ答じや。
 や。食けのくひ様が多ひ。ちつと食しょくを控へさしたが能よひ。□按夫それに附まし
 て怪けからぬ。跡あとの間の、私わたくしの所米こめ代だい壱いち石せき六ろく斗と喰くました。△嘘嘘うそをい
 へ。そちと婆ばと二ふた人り居ゐて、其その様ように米こめはいらぬ答じや。夫それは家や賃ちんも小こづ
 かひも一ひとつにして。へ一年いちねん中ちゆうの入用いりようを升目ますめに積つもる物ものやらん。語かたれ聞きん
 と仰おほせる。□按扱さて学がく文もんをなさされて何なにしらぬといふ事ことのなひ先生せんせい様さま。

傷寒論はそらんじて、世帯の論と算盤には疎ひ事おつしやる。私所の米代と弟の所へ取次ましたの共に壱石六斗代。その中へ式朱一つ入まして、跡が間違ひますゆへ、そこでへ壱石六斗式朱、間違ふ内の講釈もふ仕舞て夜抜しやふかと思ふて居ります。△そんな事せぬが能ひ。功者な人に相談したら仕様も有ふ。へ性は道によつて賢し。□銭はうちに無ふて不自由な。△伺いふのじや。此方の工面に弱つて居るのに、そんな陰気な事いふて呉ると逆上して来た。肩ぬがして呉へ。へトいしやたつ。□めつそうな。此寒ひのに肩ぬぎなさつたら風ひきますぞへ。△伺じや知らんが、頭が割る様な。□そりや頭痛でござりませふ。△サア頭痛へ浄るり、三味せんツツンへ治兵衛の困窮一々残らず。□へきこしめしたるかんしやうへ。△へ柔和の形相たちまち変り。□へ御眼尻は下へだれ。△伺いふのじやぞいな。人の眼がだれて有の、額が出て有のと、なんぼ粹でも人中で、そんな事はいふて貰はぬ方が能ひ。□デモあなたの近眼で爰から白眼まじやましても皆様の方へは届ませぬ。△伺いふのじや。人の眼の小言斗いふて、あたいまへしい。往んせ。□是は大きに不調法。△へヤヲレいねよふしらん。太兵衛、治兵衛の弟の無分別、聞捨ならぬ此の晦日。□へ銀がなければ節季も越されず。△へおゝいにすゝむ朝夕と知らで、食喰ふ食滞あやふし。□何の治兵衛じや。ヨ、食滞するほど喰やしません。△命には別条あるまい。□あなたんでそのやうに腹が立たす。△サア氣違ひになる下地知らん。めつた無性に腹がたつ。天拜

山じやなひ。けつたいなんじや。へ此ときドロへ。□申へ、また鳴ます。肩お入なされ。臍とられたら悪ふござります。△人の事かまふ事はない。へヤアへしらん太兵衛、かゝる難洪を聞うへは片時も早く其方は、内へ帰つて情出して、節季を凌ぐ工夫をいたせ。□そんな世話して貰はいても大事ない。頼母子にも入て呉もせず。△人の懐を当にせぬが能ひ。に追つて貧乏なしじや。へわれは是より根気を碎き、治療に骨折おこなはれ、玄伯浪花に鳴医者つち、節季をすつぱり払ひしやうへ。へ此ときむめの花もつて、こたつうへにあがる。△あなたも難義なものじや。コリヤ何でござります。△天神氣違ひ自身はたへ。□へ医者なんぎ医者難病の命。△へ神代の棚おろしじや。

風流俄天狗卷之壹終

風流俄天狗卷之二

杓子定規

△客

○茶屋女房

□侍

へ此にわか、世かいは北のしんち也。かげにてさはぎうた。女房出て○コレおたい、二階へお着もつてゆきや。おちよぼは伊丹八十へいて、松木さんが出来ねば、杉さんでも大事ないといふてお出。おくの八畳に金さんが狸寝入してじや。起しや。四畳半へお茶持て行や。モウへお客と云物は意地悪ふ一時に成ものじや。へ粹がつたるきやく出

て△お爪つめどふじや。ゑら忙いそがしじやな。○ヲ、めづらし、天狗てんぐさんどつち風かぜが吹ふました。△どつち風かぜは南風みなかぜ。よふすが有あつてきたのじや。○なんと思おもふて。△なんとも思おもはずと。○どふしてお出いで成なさつた。△歩ありて来きた。○あほらしい。丸まるで開ひらき店みせじや。△ひらきに来きたのじや。○嘘うそばつかり。コレお多た盆ぼん、お茶ちや汲ひや、久ひさしぶりじや。誰たれぞ呼よびに遣やりまじやうか。△おいて呉くれ。おれが気きにはまる様やうな芸げい者しやは一人も有ありやせん。○またそんな事ことおつしやる。あなた何なんでも小言こごといゝ成なさる故ゆゑ、天狗てんぐさんとは能よふ附つた。△時に広嶋ひろしまやのかきはどうしたへ。○ひろ島しまやのかきさんは、冬ふゆから正月しやうげつへ懸かて能よふ時とき行はりましたが、国くにへ引ひてござりました。△惜おしし事ことじやが、併しかしいつはぬくなるといかん。○また此冬このふゆ、橋台はしだいから出でてじやといふ噂うわさじや。△なんぞ珍めづらしい物はなひか。○珍めづらしひといふたら、伏見町ふしみまちへでも行ゆかねば有ありやせん。ヲ、有あ々々。あなたにはまりそふな事ことじや。東店とうてんから珍めづらしい芸げい者しやさんが出でました。浪人出らうにんのたいこ持もちはどふでござります。△そいつは珍めづらしい。おれ向むじや。尼出あまのおやまは古ふるひが、侍出さむらいのたいこ持もちは新しい。呼よびに遣やつて呉くれ。○そふ云いふあなたが変物へんぶつじや故ゆゑ、てふどはまつたのじや。コレおちよぼ、東店とうてんへいて浪人出らうにんの芸げい者しやさん呼よんで出いでや。△扇屋あふぎやでは今は誰たれが能よひ。○扇あふぎやではマア若松わかまつさん。△扇あふぎやの若松わかまつ、古ふるひ物ものじや。○鶴つるさんも日ひの出ででござります。△扇屋あふぎやの鶴つる、日ひの出でが老歩金位らうぶきんゐではさゝぬか。○あほらしい。要かなめさんが堅かたひお子こじやぜ。△嘘うそいへ。要かなめの堅かたひのは初手しよての間あいだじや。今は能よかさしてぐたゝいふげな。へかげうた有ありつばなる御おんるすめめきたるさむらい、はかま・

はをり・大小たうしやうにて、ごめんといふてずつと上座じやうざへとをりすわる。兩人ににんこわがる。いろゝすてぜりふ有あ。女房にようばうおちついて手てをつき。○あなたは【挿絵せんがい】柔なかな人は武士ぶしなり花はなの庭にわ】どなた様さまでござります。□侍侍先刻せんこく御使者おんしやに預まかりましたる則すなはち、東店とうてん大だいめう屋やより出でましたる浪人出らうにんのたいこ持もち。先達せんたつて当とう家は勿論もちろん、島中しまちゆう一統いつとう姓名せいせいを披露ひろうに及びましたる芸げい者しや、片山郡かたやまぐん左衛門ざゑもん、実名じつなは忠利ちゆりと申ます。以後いごはお見みしりおかれくだされまじやう。○エ、何なんじやいな。おまへが芸げい者しやかいな。□左さやうでござる。△こいつは奇き妙めうじや。○なんの奇き妙めうな事ことが有あ。めつそふな芸げい者しやがお客きやくより上座じやうざする事ことがどこに有あ物もので。こちらへおいでいな。あんまりあほらしい。□侍侍イヤ然しからば。○なんの然しからばが有ある事ことで。こつちへお出いでいな。△イヤゝきつゝ面白おもしろひ。たいこ持もちのへいゝいふのは聞き飽あて居ゐる。コウけんしきの高たかひ所ところが妙めうじや。○餘あまりあほらしい。おまへの様やうな芸げい者しや見みた事ことがなひ。どふ云物いふものじやいな。□侍侍なるほど委細いさいを申ま上あねば、相分あひわかりませぬ。拙者せつしや、実じつは去西きよさい国方こくかたの諸侯しよこうに仕つかへましたる所ところ、高木風かうまつかぜに憎にくまるゝ諺ことわざのごとく、朋輩ほうばいの讒言ざんげんによつて浪牢らうらうと罷まりなり、浪花なげなへ参まりましたる所ところ、知音ちいんの者ものとてもなく、手跡しゆせきの指南しゆなんいたそふにも悪筆あくひつなり。辻八圭つじはちけいを見みよふも易学えいがくもなし。やむ事ことを得えず、此新地このしんちへ参まりましたる所ところ、則すなはちはひがしめだいのや、東店とうてん大妙屋だいめうやと申まは諸侯しよこうに縁えん有ある家号けいごう、これに身みを寄よせ、たいこ持もちと相成あひなりましたる事こと。イヤハヤ当所とうしよの留主居杯るすゐに対面致たいめんちしては面目次第めんぼくしだいもない儀ぎなれど、そこが彼大功かだいこうは細瑾さいきんをかへり見みずといふ語ことがござれば、則すなはちたいこ持もちと相あなりましてござる。以後いごは御ごひいきになし下くだされませ。△妙めうじやゝ。ゑらふ面白おもしろひ。○女

なんにもおもしろい事はなひ。チンブンカン、とんと分らぬ。おまへ
 芸者になつて何が芸じやへ。□成ほど芸道の儀は、幼年より武家に生
 立ましたれば、儒学の事は深ふは学びませねど、軍学は大體孫子・呉
 子・太公望、是等はそらんじ居ます。△寄妙く。こふいふ芸者は常
 の客は得うけぬ。おれが様な粹でなければ、はまらぬ。○あほらしい。□
 また武術は佐歩利流の鑓をたんれん任り居ます。劍は眞の神影流、柔
 術は大橋流でござります。○そんなお経見たやうな事云ずに歌など諷
 はんかいな。□成程、歌は近体は疎ふござります。万葉国学を任りま
 して景仲・真淵などに寄ます方でござる。△よつほど多芸な男じや。
 ○何が多芸じや、訳がしれぬ。歌といふのは今流行江戸歌の事じやわ
 いな。□江戸歌かな。是も故人蜀山・六樹園などに交りまして少し
 は詠ます。△江戸は地口の流行所じやげなが、口合はどふじやな。
 □口で居合をぬく事は出来にくふござります。○そんな事いわずに物
 間似はどふじやへ。芝翫が出来そふなものじや。□仕官の望、兼てこ
 ざれど、未だ時を得ませぬ。△是も妙じや。○あなたばつかり妙がつ
 て、私しやとんと分らぬ。そんな堅ひ事はずと何ぞやはらかな事を
 云て聞し。□柔は私し急度手覚ござります。おかみさん、少しおのき
 下され。△何ぞはたへかな、面白かる。へ女房かたよると、侍はをり
 ぬぐ。身こしらへして客の手をねじる。△アイタく。○めつ
 そふな、こりや何をするのじやぞいな。□則是ち是大橋流でござり
 ます。○何流じやしらんが、お客を手ごめにするといふ事が有物かい
 な。△だんないく。是が面しろい。誠に粹でなければ此芸者は請ら

れぬ。花遣てくれ。○あほらしい事いゝ成され。△イヤ〜柔はよつぽど上手じや。おれの紙入に二歩金がある。出して遣てくれ。○いためられて花やるものがどこに有物で。△爰が粹の骨木じや。へかゝぼやき〜、きやくのかみいれより金をだしてさむらいにやる。□
 是は恐れ入。僅なる柔術を御教授いたして、かやうの御謝儀に預るは甚だ痛みました。△そちよりはおれが痛む。□時に旦那、私し此柔の外に得ましたる事がござります。是は彼の元の揚子曲よりおこりましたる死活の術でござります。活の方は覚束なひが、二たび生かへらん真の当をいれまじやうか。△めつそふな何ほ粹でも当殺されてどふなるもんで。○何いゝじやいな。おまへに当て貰はいでもお客に当られてどの様に難義して居るぞ。モウ〜そんな事やめて舞なとまいんかいな。□舞はござります。△舞が有か。ゑらひ〜。○早ふ舞〜。□例年旦那の方に正月具足鏡開きの節、私しが舞しましたが、例年の事なれば、絶ずもまれて裾野の桜、四方へばつと散かと思へて花衣さす手もひく手も△コレ〜。口は達者ながそりや何して居のじや。訳がわからぬ。○天狗さんアリアヤ何の舞でござりますへ。△サア武士だいいじやあるか。□へイヤ何芸も覚へてない。エライへ不自由だいいじや。

思案の外

△ふり袖娘

○坊主医者

へかげにて、こと・さみせん、すがゝき一だんひきおはるとふりそでむすめ出て△コレおさつ、お師匠さんがお帰りなさつたら、琴も三

味線も直して置てたも。なんじや知らんが、気が悪ふてならぬ。全体こちのおとゝさんは銀子のばす事ばかりいふて、おかゝさんにもそれが移つてしわい事ばかり云て居なさるゆへ、とふから養子する〜と云なさつても、誰も来る人はなひ。私も餘りあほらしい。廿越して振袖でも有まい。古ひ娘じやと余所で評判するじや有。友達のお子は皆舞さんが出来て、やゝさん迄有のに、此様にして居たら、ろうがいになるふもしれぬ。追附また正月じや。ろうがいや神のをしき売に来たら、年が一ツゆくのにつまらぬ物じや。エ、なんといゝじや、お医者さんかへ。お通りなされと云ておくれ。へぼうずいしや、あさぎはぶたへの着つけ。くろちりめんはをりにて〜。○エヘン。△ヲ、貞女さん、御苦勞さんでござります。○どふじや、いと。お心持は。△こゝろ持は替りませんが、てん【挿絵 思ひ懸なひ口説人やすゞみ床】てこ餅は、でじま仕立でおいしうござります。○是は怪からぬ。姫子ぜが、そんな事。でじまじやの、太白じやのとおつしやると、人があまひと云ますぞへ。△貞女さんのおつしやる事じやけれど、虎屋饅頭も喰にやたてらぬと云て、わたしや甘ひ物が大好でござります。○困た物じや。ドレお脈見ましやふ。△申、貞女さん、全体私の病氣は何でござりますへ。○サア廻りはどふでござります。月々に怠らずござりますかな。△左様でござります。毎月廿一日にかゝさず御霊さんから参りまして、三津寺でおさめます。○夫は大師廻。私しのお尋事は月の物はどふでござります。△好の物はしばると酢もじ。○是は怪からぬ。何でもあなたの御病氣はおけつたわさじや。△おけつたわさ

なら稱荷さんへ参つたらどふでござります。○難義なものじや。何分
 お口の軽ひのが病ひ。併し根へ入た事じやなひ。俄病じや。少し葉古
 谷けが有。なんでも私はけつづんと見た。△けつづんとおつしやつて
 も、おいどは悪ふござりませんが。○能ふしやべるいとさんじや。振
 袖めして、そふ口が軽ふては似合ません。△サア私もこんな大きな
 形でふり袖着て居のは外聞が悪ふござります。○イエ／＼お屋しき方
 ではなんほも振袖めしてかつ山に結てござるのがござります。△左様
 なら私も屋敷のいとの様に見へますかへ。○見へまするとも。△ど
 このやしきのへ。○化もの屋敷の。△あほらしい。そんな事云ずに早
 ふ直しておくれなされ。○心得ました。何でもおなかくわいが有じ
 やある。△会がござります。お師匠さん所に仕舞会がござります。夫
 で琴をさらへて居ます。○マア／＼おなかを見ましやふ。横におなり
 なされ。△左様ならお赦しなされませ。へトおびとひて、まくらして
 よこになる。○御遠慮なふ、ずつと長ふおなりなされませ。雜俳の
 句に、琴彈やうに居る鍼医者といふ事がござります。斯ふせんと工合
 が悪ひ。しかし大きなからだじや。△又なんぞ悪口いふおもふて。
 ○無理もなひ。琴の糸は十三。こなたのいとは廿三かいな。△ワ、イ
 ヤ。私しや年弱でござります。こんなからだでいとさん／＼と云れる
 のは恥しい。○こゝろ得ました。此後はいとさんといゝませぬ。△何
 とおつしやるへ。○御りやう人さん。へトことのしらべになる。△ワ
 いた。待てお呉なされ。あなた多らしい爪じや。○これは御免。いた
 ぶござりましたか。私しのは八ッ橋でござります。△いかに八ッ橋じ

やて、人のお中をかきつばた。爪形で紫色に成ました。○イヤこ
 ろえました。○奇麗なおなかじや。誠に雪のはだへじや。△又おだ
 て成さる。△これよりあんぶく琴をひくしうちになる。△腹も雪の
 はだへはしろきあなたかな。△ほんにむちや医者、なむさん、こな
 人よ。○なんにも無ちやしやしません。△モウ、おいてお呉成され。
 何じややら、あたいやらしい。おなかを撫て、段々したの方へ手
 を遣て、あたいやらしい。○イヤこふでござります。私も老人の療
 治してはかやうな事はなひが、あなたの美しひおなかを撫ましたら、
 つい出来心。下の方へ手を遣ましたけれど、只今の所は臍下丹でんと
 申て療治所。まだお大事の所へは一寸ほど間がござります。△あたあ
 ほらしい、だい嫌じや。いんでおくれ成され。○その様にお腹の立の
 はかん癩。あなたの病氣はしやくじや。△かまふてお呉なさんな。○
 それが癩じや。△コレしやくじや姫殿。へゆきの合の手になる。其
 ころはをりそでまくりころもなる。△ヲ、いやらし貞玄さん。其
 顔なんじやいな。○忘たい。△何い、なざるぞいな。私しや忘れ
 まい、と思ふても忘れよつて、お師匠さんにさらへて貰ふて居り
 ますのじや。○へしやくじや姫殿、どふぞ私の願ひを。へかげにてう
 たへきくもさびしきひとりねの、ト此間にむすめおびしやふとする。
 いしやくひつばる。すてぜりふ、しうちあり。△どふぞ得心して無
 さして下され。△おゆるしじや、いやらしい。へゆるして下され貞玄
 殿。○モウ斯なつたら絶体絶命。否でも応でもなでいぬ。△無理
 な事いふ人じや。いやじやといふのに。○へわれ人につらければ人ま

た我につらしといふ。△何のおまへがつらかるふ。私しや否でならぬ。
 けつたいな人じや。○おまへさん、余まり引しやなぐり成さるよつて、
 私のいつてふらの羽織、肩も袖も破れたがな。△誰が知つた事が有て。
 ○へやぶれ羽織に破れ肩、これも誰ゆへしやくじや、姫。△アレ申、
 おかゝさん。○めつそふな。夫いはれてたまる物か。モウ御了簡なさ
 れ。△貞玄なお方かと思ふたのに、ゑらい医者らしいお方じや。○へ
 これは大きにはたきました。へせいげんはことを任せんずる。

千代の戯

亭主

松の精

狸

へかげにて、ときだいこ九つうつ。ていしゆ、くろはぶたへ、ちやう
 はかま、てしよくもつて、すこしほろゑいにて出る。△扱今夜の客
 来、マア、機嫌能ふ立して仕舞ふた。亭主といふものは心配なもの
 じや。火の用心、万端氣を附ねばならず。翌日はまた正午の客をする
 故、庭の掃除を三介に云つけて置たが、丁寧仕おれば能ひが、なん
 じや、この紙くずは。客が落したと見へる。なんじや、海老の皮か、
 扱、どふらくな客も酒に酔とゑては、竹縁へ小便したり、鉢前へ大
 悦したりする物じや。○ハ、待合の笠と箆が見へぬが、三介が外へ
 直しおつたか。今に始めぬどふらく者じや。へいまを始める旅衣、日
 もゆく末ぞ久しき。へドロくにて松のせい出る。たかさこのうはの
 こしらへなり。手にほうきもつヤア、あなたはどこなたでござりま
 す。【挿絵 初しばゐ狂言綺語もほとりあり】○へたれをかも知る人
 にせん高砂の松も昔しの友ならで。○ハ、私の知た人は播州にはこ

ざりませんが、また高砂辺に朋友もなひが。○イヤ／＼不思議は尤じや。私しは此庭の松の精じや。精が出たのじや。□それは目出たい。有難ひ事じや。しかし余まり思ひ掛がなひ。お出まし成さるなら、ちよつと御案内が有は能ひのに。○へおとづれば松に事問ふ浦風の落葉衣の袖そひて木影の塵をかこふよ。□めつそふな。あなたが庭をお掃下されますか。夫はほうきに御苦勞さまじやが、まへかた、高砂や颯ふて門口を掃て錢貫に来たのは、あなたの御連中でござりますか。○あほらしい。あれと一口にいふ貰ふては叶はぬ。あれは乞食じや。併しあれも松に縁が有。長まつと云所から出た者じや。□成ほど申／＼。失礼ながら待合の笠と箒が見へませぬが、あなたの持てござる箒は此方ではござりませんか。○イヤ此箒は前／＼庭へ出る時、借用いたす。□借用いたす。てゝ人に断もせず。そふして笠はどふ成されました。○見へぬ物を皆わしの業に仕て貰ふては叶はぬ。笠の事は此方には知らぬ。なんぞの待合じやなひか。□ハテ替つた事じや。○アレ／＼、向ふへ笠がある。いて来るがあれじやないか。へたぬき、ばつてふがき、手に一りんいけをもつてでる。ならばけおにの出のはやしになる。□ハ、狸めでござります。此堀の外は浮世小路の大道。折々は来て悪ひ事を仕ます。△おまへ方、最前から笠の事をいふてじやが、笠は私しが借つて着て居ます。○見れば一輪生を持って居るが、あれも当家のじやなひか。△是も私しが直して置ました。□何を横着ものめが。誰が狸もせぬのに。○ハ、あいつも折々爰へ出おると見えるが、水道是迄見た事はないが、あいつも金太郎じやナア。□左様

でござります。狸の金太郎あつちへ行。△旦那さん、私しばつかり叩つて、あの人は何でござりますへ。○私は此庭の松の精じや。△松の精ならやつぱり化物。こちの仲間内じや。□失礼な事いふな。われと一口にいれる物か。年経る松の精さま。樹霊といふて尊びおかたじや。△樹霊か知らんが、大方あは樹霊じや有。○何ぬかすのじや。其方の様なむさる形で茶の間の辺の徘徊はならぬ。□あつちへ行おれ。△いへへ、私も狸じやけれど、茶の気もござります。○何じや、茶の気が有。□こりやおかしい。われが宗匠は何といふ。△私しの宗匠は水道の掃除が行届かぬゆへ、きつふ掃除せんといふます。お前さんの宗匠はへ。○此方は植松で青木調法じや。□茶道具屋が有か。△ござりますとも。水道はどぶ／＼どぶ庄といふます。□夏向は蚊がたくさんふし見町の道具屋か。○大分よひ口なやつじやが、そちや金玉が八畳敷四畳半へは這入れまいがな。△それで私しの名を茶方の金大きいといふますはいな。へトばつてうがさを取てほる。□おかしい。併しあいつは格別。あなた様はどこをお歩行なされます。○此方は異形な物ゆへ、人の往来せぬ所を通るじやて。へトたぬきのかさを取て山うばになる。へゆく道は誰も通はぬ山中を。□市中に山中とは。△このいけの事でござりますか。○ませたやつナア。□いつぞいた事が有か。○いつを今日とも果しなきへ此ときほうきの多に手しよくさし、こはさし出しになる。○ませて我名をゆふ月の△浮世を渡るトふしも。□我が内は浮世小路は知れて有。△イエ／＼へおんらが住家はナア安治川の川下で。□伝法か、尻なしか。○

へ木の根を枕にころび寝。△あなたはちよつと御寝なるのも、木の根を枕に成さる。われが寝所はむさい事である。△へもし寝間へしよでもばゞでも来たならば。○へとびのひてこちやくさひめに合ぬへ。へ此合の手、山うば・金ときドロ／＼にて、いしやうぬぐと、おの／＼はかまはいて居る。□是は／＼、どなたかと思へば先刻のお客達。けしからぬ御趣向じや。△お恥しい。誰が茶呑もせぬことを。○へお跡仕舞のじやま姥をいたした。

おくれ咲

△老人侍客

○仲居

へかけにてさわぎうた。なかる出で。○ア、酔ふた。コレ宮さん
をせきにやつてお呉へ、お蘭どん。モウ／＼御免。アノ肥州さん
の長ひ酒にはてうせん叶はぬ。ギヤマンでいくつ呑だと思ひ。モウ
／＼とんといやまんじやはへ。夫はそふとアノ官左衛門さんが宮様に
ゑら擬で、私しを頼む／＼といふ成さるけれど、肝心の物も放さずに、
應對の出来る物じやなひ。困た事じや。へト此とき老士出で。△どふ
じや、お花。同役どもに譲つて暫時休足かな。○官さん、お赦し。い
つかうぼれじやわいな。△ぼれて見せるが勤の習ひじやないか。イヤ
モウ身ども、年罷り寄てあかんぞ。○アノ嘘わいな。△時に手前の忒
百疋の恋人はどふしたか。○ヲ、すかん。失礼いふてお呉成さんな。
憚ながら金銀の様なさもし物で、売買にはいたしませぬ。△夫ゆ
へある時はたゞぼこすといふ事じやぞ。○ヲ、憎てらしい。かくぞ
へ。△イヤ其爪でかゝれては叶わぬ。併し今晚は大めいていじや。先

刻手前の夜桜や、誠に妙じや。友五郎もはだしじや。可愛そふに座を
 能ふ持近年の出来ものじや。○座をよふ持出来もの人を根どとか何ぞ
 の様に。△ハ、時にお頼申た姫の事はどふじや。○そりや承知でこ
 ざります。△承知。アハ、と笑ふてつゝに出来ぬ。じやなひか。
 ○こゝ迄ござれにするふと思ひなさんな。何時でも罫は明ますけれど、
 今の因縁じやわいな。△そりや尤じや。かやうな老人が若ひ女にほれ
 るのは前生の因縁じや。○何いゝなさるぞいな。あなたも行所迄行
 気なら放し成されいな。△【挿絵 生た人の為に廓の灯笼哉】生るを
 放す放生会といふのか。○鳥の悪ひお方じや。是を遣ひなされといふ
 事じやわいな。△サア夫故先頃より聊進物を致し呉たでないか。○
 ヲ、おかし。あの様にちび。と下戸に柳蔭吞すやうにせずと、もそ
 つとはつ。とした事を成されいな。△承知じや。全体随分儉約
 いたして、いくらほどの事じや。○マア爰で日柄廿ほどに十兩位
 をなされいな。△そふして二会目からへる事か。○何いゝなさる。随
 分多ひ程宜しひのじや。△フウ此方の調達講とは大分算用の悪ひ物じ
 やナア。○あほらしい。△姫は今晩も来ぬのかな。○あの子も此間か
 ら糞でわるひと云てござりました。△昨日途中で見たが、さのみ悪
 そふにはないが。○本真でござります。併し今夜は是非来るといふて
 三味線箱が来てござります。其ほんまで思ひ出した。あなたに上まし
 て呉いといふて本が来てござります。へトさみせんばこ、ふろしきち
 やいろ大もんつき也。是を出し中より本出す。こりや何でござりま
 すへ。△ハ、先頃頼置た当所の流行歌。国本への土産に書いて呉と申

だが、早速出来たか。何じや、紅筆姫の直筆有難ひく。○おつむりに載ていたゞひて居なされ。△いかさま何よりのたまもの。斯ふ戴ひて拜領たもふ左衛門とはどふじや。へト此とき白てぬぐひ、ふところよりおとす。○私しがこし附に斯ふしませふ。へトこの本をゑぼしにして、手ぬぐひにてくゝろふろしきをとつて、大もんにきせる、三味せんばこ。相引になる。この姿で宮さんにあひたひといふ腹かへ。△勿論く。○ほんまにあの子あんばいが悪ふござりませ。△また嘘をいふ。其方のぢやらも久しいものじや。仲居すまの守じや有ふ。○私しも乗かけたからは今の金御承知かへ。△手前宮は病氣といふが、昨日見受たとき、身じまひをして、顔は真白かくすは真赤ひ。どれがどふと人眼には分らねども、お医者達はよつて見分る煩の顔。ついでに見ねども病人の顔と元氣な顔。一ト目見ても違ふはず。コリヤ御邊茶にするに相違有まい。誠の煩ひか見に遣れく。○見に遣ふが、聞に遣が、宮さんは病氣。外に仕様はなひわいな。△しかとそふか。内に居か居ぬか、家探して呉ふか。○何いゝなさる。勝手も知らず。△いかさま。○ちつときれ成さつたら今でも呼て来ます。△そふいへば身共も武士。へ一端いふた刀の手前、帯刀が紙入のきれ味見て、惚るなど股立からげつゝ立たり。○仰山な怕りします。左様ならばお紙入れを預て置ませふか。△やるはく。明しをもてく。○ハイく。幸の廻り灯籠是を釣ませふ。へトとうろうもつて出づる。ゑはおどり子也。△是迄宮を呼んでも肝心の事をせぬ故、花はかい損じや。○これから私しが花損にせぬわいな。呼んで来ますよつて、くわつと世界

にしなされへ。△また芸好だてか。○へげいこの立に弾三味と。△へたまにおこれるおやじ客。○へなんぎなにこまる。△へ初手のつゝへ。○つゝへいとふてどふなる物で。切なされく。△へむぢやになるかね仲居のつめ。○へきれと有も。△へをしうなりへ此間しじうしうちあつて、此をしうなりのもんくのとき、かみいれをふところへいれる。○そんないぢりきたなひ氣なら、思ひ切なされく。△へいまが思ひの切所。○情なひお方じや。其風俗はなんじやいな。△サレバ何にたとへたもので有ふ。○大かたみ身がわるひおんどであるか。△イヤく。へこりや放蕩の宮の散財目じや。

風流俄天狗巻之二終

風流俄天狗巻之三

月の名所

△親仁

○大通人

□幽霊

へかげにてうたへまつはからさき、かすみはとやま。月のめいしよはすまあかし。ハレハヨイくく。○大つうじん、ごふく屋十兵へこしらへ。○本におれがやうな連の強ひものはなひ。富の札を買へば残ず当る。相場をすればすくひ通す。ちつと銀が減したいと思ふても風雅に生れ附た故、色遣ひは否じやよつて、先今度播州廻りと出掛たが、成程東海道とは違ふて大分風雅な所じや。其かわりめしも風雅くし

である。ドリヤ行ふか。へ平作仕たてのおやち出て△申く、旦那さん。お荷物でも有なら持してお呉なされませんか。○ハア、貴様は平作じやないか。とつても附ん所へ出て来たな。△いやもう平作たまで腹は跡へ寄てござりまする。銭はもうからず困つて居ますが、旦那さまはまた沼津へ出て来そふな拵らへで、爰へはどうしてお出なされました。○イヤおりやしまつは大嫌ひじや。銀のへらしたいが病ひじやが、貴様この辺の人なら名所の案内をして呉んか。△けつかふなお身のうへ。左やうならあなたは播州廻り、私しは難波せぶり、ゑらひ違てござります。○大分面白ひ親仁じや。貴さまに頼みたい事がある。おれも大坂で栄耀を仕尽した故、何でも此辺の様な風雅な所に住たひ望して。家が買たいが、どふぞこの辺に景の能ひ所に売家が有なら世話して呉んか。△随ふんござります。此辺は昔から風雅な人の住捨ました家がたんとござります。皆只今明家になつて売に出てござります。○サア其売家を見せてください。△畏りました。私しに附てお出なされませ。へトぬまつの合かたになる。すてせりふいろく。△
 ○また貴様を頼む事有。家を買たら妾を置ふと思ふて居る。此辺の女を世話して下され。△あなたも物好な。大さかの女を見たお眼で爰等て妾を置ふとは、よつほど風流なお方じや。彼の行平の跡を追ふて、まつ風むら雨といふやうな姫が有ふかと思ふてござるのか。○イヤくまつ風や【挿絵　むしの音や何某どのゝ驕り跡】カステイラのやうな甘ひ物は嫌ひじや。また行平で物たく様なかじくろしい事は猶いやじや。△申く、売家は爰てござります。よつ程大屋敷でござり

ます。○ほんに大きな明家じや。景色は至極能ひが、間数がこてくして有な。△誠に風雅な普請、奥座敷は源氏の間と申す。○ハア義経でも住で居られた所かな。△イエ、其源氏じやござりません。畳数が六十畳、それで源氏六十帖。○ハ、成ほど、ひかる様にふき入て有ふといふやつじやナ。△次の間六畳、爰が勝手宜ふ致してござります。きつう為のよひ所じや。そこに源氏の大将が居られましたげな。○六畳の半官為よし居られたのじやな。△こちらが三畳しき。○ちつと家根が低い。△こゝに刀鍛冶が居ましたそふな。○三畳小座しきむね近じやある。△そんな事いふて居ては果ぬ。此家お氣に入りましたか。○最そつとはまらぬが、外に明家はなひか。△隣村の皿やしきはどふでござります。○新しいやしきか、それもよかる。見せて下され。△サアお出なされませ。へトシノ入合方になる。みちゆき。△申く、爰でござります。○何じや。草ぼうくと生茂り、家は崩れかゝつて有が、何の是が新やしきな事が有。して古やしきじやが。△へイヤ申、是が世に名高ひ播州皿屋敷。○へヨウ。△へお菊及びでござりませふがな。○何じや、うそ気味のわるひ所じやナア。△風雅な所とおつしやるとマア爰等じやあるうか。○附物が有かな。△第一の附物、此井戸でござります。是が直打でござります。○此家なんぼ程じや。△百両と申事でござります。○とんと負らぬかな。△左様でござります。○ハア夫でまけんもんしきといふのか。△マアそんな物じや。○大分普請せねば成らぬ。畳をよつ程買ねばならぬ。コソツ一枚二枚三枚四枚五枚六枚へドロくにて井戸よりゆうれいでる。〳

〳七枚八枚九枚ハアかなしや。○へびつくりしてア、情なひ。コリヤ何じやいな。△是が附もんでござります。○情なひ。こんな附物がどこに有もので。マアく早ふ消して下され。〳申く、かね受取ずに消といふ事はござりませんぜ。○多らひ爪長幽霊じや。マアく応対は此親仁にする。早ふ消て呉。〳そんなら親仁さん能ひかへ。△よしマアく、ちよつと消へたく。へドロくにてゆうれいきへる。〳親仁ありや何じやいな。△あれが家附でござります。○情なひ物が附て有な。嬢に厄介の有のさへ能ふなひ物じやのに、家に幽霊が附て有てどふなる物で。百両にだれが買ふもので。おれが直打はマア銀五枚かい。△あほらしい。○そんなら六枚。△めつそふな。〳七枚へドロくにて〳八枚九枚ア、かなしや。○情なひ。又出たわい。〳申くくとんと此家まかりませんぜ。△アノ通でござります。本人がまからぬと申て居ます。○どふいふ物でまからぬ。〳どふいふ物といふてとつくりと見ておくれ成され。仕込のゆう霊と一口にいふて貰ふては叶ひませぬ。△旦那、足元を見て直切ふとなさるけれども、幽霊じやよつて足はござりません。○ぜんたい幽霊はもそつと色の白ひ物じやなひか。〳それは素人了簡。此井戸はかなげがござりますゆへ、ちつと色が附ましたのじや。△元ほどの位に附て有ぞ。〳此ときゆうれいふところよりそろばんをだす。〳マア此白むくてもいろやで借つては心わるひよつて、三雲屋の代呂物でさばきも大長兵衛で買ました。大たい元直が此位に附てござります。中々引ません。○まつこと負にくひなら、モウよしにせふいのふ。〳何じや